

「孫疲れ」のない夏

— 帰省・滞在の中止・減少で気づくこと —

主任研究員 北村 安樹子

<「帰省自粛」が続いたお盆期間>

新型コロナウイルスの感染が拡って以降、はじめて迎えるお盆期間が過ぎた。当研究所が全国の20～69歳の男女1,000名を対象として5月中旬に行った「第2回 新型コロナウイルスによる生活と意識の変化に関する調査」*¹によると、全国的な緊急事態宣言下で迎えたゴールデンウィーク中に「自分が親や親族の家に行く（帰省を含む）」ことを予定していた人は26%、「親族（親・子・孫など）が自分の家に来る（帰省を含む）」ことを予定していた人は13%であった一方、それらを実際に行った人は1割に満たなかった*²。

例年どおりの夏を迎えていれば、今回のお盆期間も、帰省を含め家族・親族との対面交流を予定した人が5月の連休時よりもはるかに多かったと考えられる。しかしながら、感染拡大をめぐる報道や一斉休校にともなう学校の夏休み期間の短縮等を受けて、結果的には遠隔地への帰省や旅行は控えた人が少なくなかったようである。

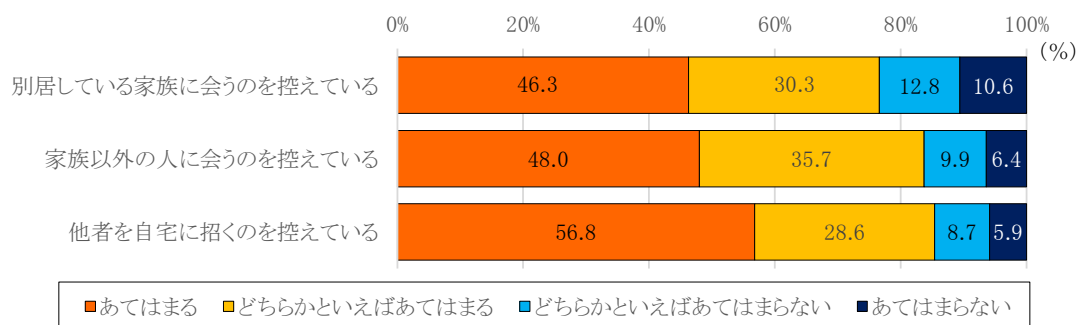
<緊急事態宣言下では、8割超が別居家族との対面接触を自粛>

先に紹介した第2回調査では、5月の連休の過ごし方とともに、別居家族や、家族以外の人との対面接触、他者を自宅に招くことについての自粛状況をたずねている。その結果をみると、緊急事態宣言下であった調査時点において、「別居している家族に会うのを控えている」「家族以外の人に会うのを控えている」「他者を自宅に招くのを控えている」といった形で家族や他者との対面接触を自粛していた人（「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」の合計）は、それぞれ76.6%、83.7%、85.4%を占めた（図表1）。

これら3項目のうち、最も強く自粛されていたのは「他者を自宅に招くのを控えている」という形での対面接触の自粛であった。社会における感染拡大を防止するための対面接触の自粛要請は、自宅という私的な空間における人と人との対面接触の機会にも強く影響を及ぼしていたことがうかがえる。

5月末に緊急事態宣言が全面解除となって以降は、物理的な距離の確保など、感染を予防しながら対面交流を行う際に気を付けるべき視点について議論されるようになったが、この調査が行われた5月中旬時点では、自宅に他者を迎え入れることや、他者との対面接触自体を控えていた人がかなり多かったと考えられる。

図表1 回答者における対面接触の自粛状況(全体)



資料：第一生命経済研究所「第2回 新型コロナウイルスによる生活と意識の変化に関する調査」。調査対象者は全国の20～69歳の男女1,000名。調査方法はインターネット調査（2020年5月実施）。

<緊急事態宣言下の生活で、別居家族に会うことを最も自粛していたのは60代女性>

では、全国的な緊急事態宣言下という特殊な状況のなかで、別居家族との対面接触の自粛をより強く意識していたのはどのような人々だったのだろうか。

図表1でみた「別居家族と会うのを控えている」という設問への回答状況を性別に比較すると、男性に比べ女性の方があてはまるとした人（「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」の合計、以下同）の割合は高く8割を超える（図表2）。女性では狭義の「あてはまる」と答えた人も6割弱と、男性を20ポイント近くも上回った。

性年代別にこの設問への回答状況をみた場合、あてはまるとした人の割合が最も高かったのは60代女性であった。年齢的には80～90代になる高齢の父母や義父母がいる人、自分が母親や祖母の立場である人を含むシニア世代の女性が、別居家族との対面接触を最も強く自粛していたということになる。この年代の女性では、4月中旬頃と比べ「別居家族と直接会って一緒に過ごす時間」や「友人・知人と直接会って一緒に過ごす時間」に関しても、減ったと答えた人が他のグループに比べ顕著に高かった*3。60代女性には、緊急事態宣言下の生活を通じて、別居家族との対面接触を強く自粛したり、別居する家族や友人・知人とのインフォーマルな対面コミュニケーション機会が大幅に減った人が少なくなかったと考えられる。

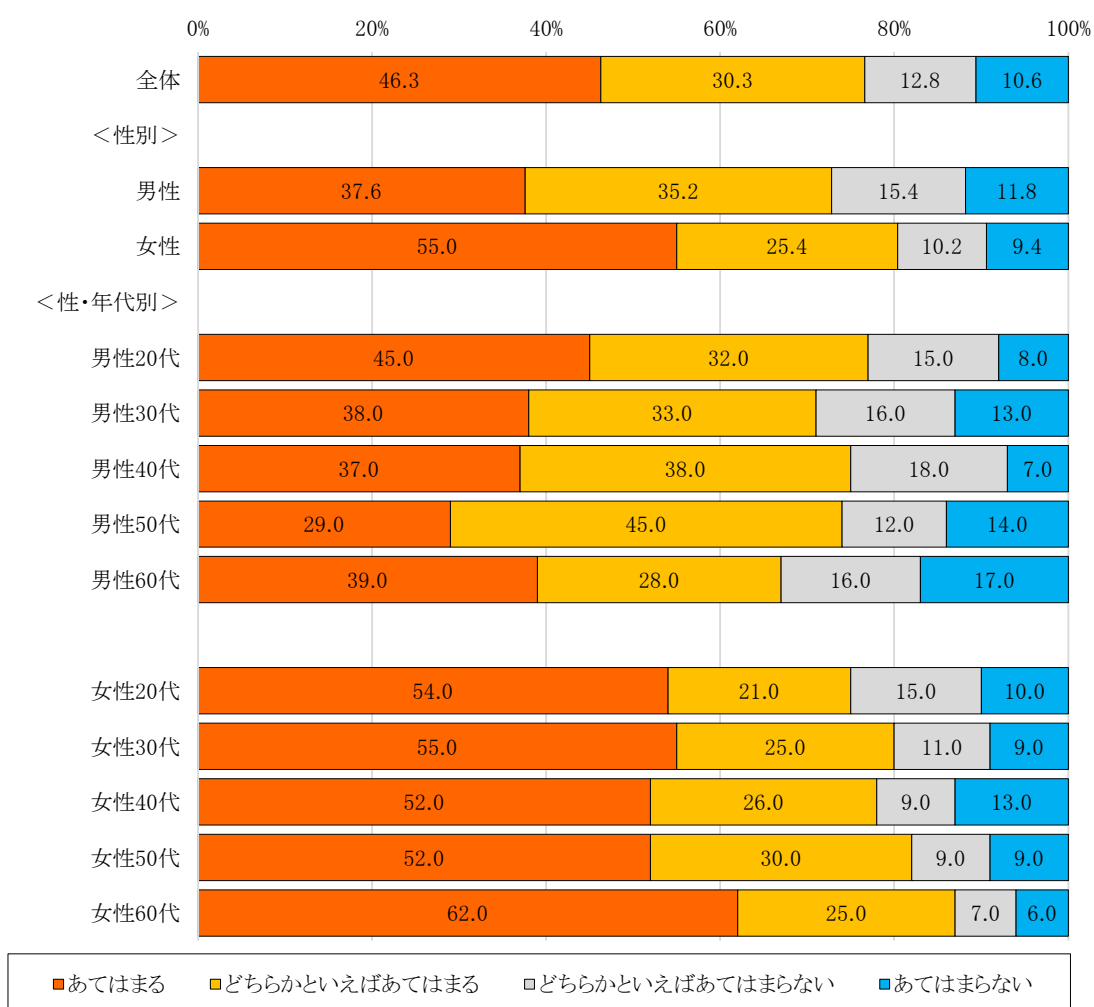
<シニア世代の女性からみた、子や孫の帰省>

シニア世代の自宅は、帰省シーズンを含めて、子どもやその家族、親族等が集まる際には、食事の場や滞在先になることも多い*4。食事や滞在のための準備はシニア世代の女性を中心になって行われることも多く、帰省シーズンの終了後には、「気疲れ」や「孫疲れ」でシニア世代の女性が体調を崩してしまうこともあるといわれてきた。

実際に、子世代にとって、自身が若く、親が元気な間は、親宅への訪問・滞在が、健康面や生活上のさまざまな気遣いを受けたり、子どもの世話や遊び相手をしてもら

うことで、精神面でもストレスを回復したり、リラックスして過ごせる機会になることが多い。しかしながら、月日の経過とともに、こうした機会は、子世代が親の健康面や生活環境の安全性を確認したり、家事や身の回りのことを手伝う機会へと変わっていくことになる。親世代からみた子や孫の訪問・滞在も、孫が幼いうちは、自身が子世代を気遣い、さまざまな形でサポートする立場で迎えていたものが、年月の経過とともに、自身が気遣われ、サポートされる立場で迎えるものへと変化していくことになる。子や孫がいない人も増えるこれからの時代は、誰もが双方の立場やこうした役割の逆転を経験するわけではないものの、こうした世代間関係の変化のプロセスに、今回のコロナ禍がさまざまな形で気づきをもたらした面もあったのではないだろうか。

図表2 別居している家族に会うのを控えている（性別、性年代別）



資料：図表1に同じ

<オンラインでもできること、リアルでなければできないこと>

例えば、今回の新型コロナウイルスの感染拡大では、移動や対面接触をともなうリアル帰省に代わり、オンラインを介してコミュニケーションを行う「オンライン帰省」も話題となった。電話やメール、画面を介したオンライン帰省であれば、子や孫を迎える準備や支援の負担は軽く、シニア女性に「孫疲れ」が生じる可能性も低い。夏休みや年末年始には子や孫が必ず訪れて滞在したり、ふだんから孫育てを頼られることが多く、それらを断り切れずにいたシニア女性のなかには、感染予防のために子や孫と会うことを自粛したり、帰省の中止・延期が続いたことで、自分が「孫疲れ」を感じない日々を送っていることに後になって気づく人もいるかもしれない。

また、そのようなシニア世代を含めて、コロナ禍以降、子や孫などの家族や友人・知人と、直接会ってコミュニケーションをかわす機会が減ったことを残念に感じ、直接会って一緒に過ごす時間をもちたいと感じている人もいるだろう。このなかには、直接会って一緒に過ごす時間に代えて、家族や友人・知人に健康を気づかう気持ちを伝えたり、元気を出してもらえるような物を贈り合うことを通じて、「つながり」を感じた人も少なくなかったと思われる。今回のコロナ禍にともなう対面接触の自粛やオンラインコミュニケーションの広がり、オンラインでもできることの多様な可能性とともに、リアルでなければできないことや、リアルで行いたいことをこれまでより多くの人が改めて考える契機になったのではないだろうか。

(ライフデザイン研究部 きたむら あきこ)

【注釈】

- *1 調査の方法や結果の概要は、当研究所発行の以下のニュースリリースを参照されたい。
「第2回 新型コロナウイルスによる生活と意識の変化に関する調査（つながり編）」
http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/pdf/ldi/2020/news2005_05.pdf
- *2 北村安樹子「ウィズコロナ時代の帰省の行方 —「オンライン帰省」の可能性を探る—」
<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/pdf/ldi/2020/wt2006f.pdf>
- *3 北村安樹子「緊急事態宣言下における別居家族とのコミュニケーション機会の変化① —女性で顕著なオンラインコミュニケーションの増加—」。なお、60代女性では友人・知人との対面コミュニケーション機会についても同様の傾向がみられる。
<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/pdf/ldi/2020/wt2006i.pdf>
- *4 北村安樹子「高齢夫婦世帯における別居家族との食事 —母方近居家族にみる親密交流—」
<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/pdf/ldi/2016/rp1607a.pdf>